「は、はうう……」
あお向けに大の字に転がされたグラスがうめいた。同じように手足をひろげてて並べてあお向けに転がされたジェアーは、小鼻をひくつかせて沈黙している。
汗に塗(まみ)れた女たちは、まるで地上に落ちてきた星のように輝いている。まるで名画のようにして輝く二人のまわりに凶鬼たちは集まり、これを取り囲んだ。
「キヒヒ……」
「オンナ、オンナ……」
無様にのびている騎士たちに嘲笑が浴びせられる。ジェアーはその嘲(あざけ)りに唇を軽く噛み、グラスのほうは眉をぴくりと動かした。
そして。
凶鬼たちは疲れを癒すようにして、素っ裸のまま横になる女たちに祝福を与えた。
「グルル……」
亜人の一匹が自らのペニス、硬く勃起したペニスを握ってしごきはじめる。他の凶鬼たちも競うようにしてペニスを自らの手でしごく。
「グルル……」
「グルルル……」

気味の悪い獣の咆哮(ほうこう)が森のなかに響く。全裸の女たちは手足を大きくひろげたまま、悲しげに、幸せそうに顔をしかめて倒れている。凶鬼たちは唸りながら女たちの肌にペニスの先端を向けて、これを擦り、しごきつづける。

自分たちが狩った獲物に対する匂いづけの行為であった。そして。

ぶぴゅっ！

二人の女を取り囲む凶鬼の一匹のペニスから白い精液が溢れて飛んだ。飛び散った精液は、そのままグラスの左の乳首に命中した。ピンク色をしたイチゴの実にかかったクリームのようにして、グラスの乳房の先端が白く輝く。

「ん、んん……」

グラスは異変に気がつき、ただ小さく甘えたように鼻を鳴らし、一方、凶鬼たちは最初の斉射をかわきりにして、次々に白い砲弾を女たちの肌に浴びせかける。

ぶぴゅッ！

ぴゅっ！

凶鬼たちは一匹、また一匹と達し、白い精液が矢継ぎ早に飛ぶ。グラスの乳房が、腿が、股間が、ジェアーの頬が、下腹部が、乳首が飛んできた穢(けが)れた毒矢によって白く汚されていく。

「う、うう……」
精液の的にされたジェアーがうめき、グラスもまた鼻を鳴らす。
「ん、んふう……」
憤り、抗議をするというよりは、甘え、乞うような女たちのため息であった。
やがて。
全身を白く輝かせる精液の漬物が完成した。頭の天辺から足の先まで白い祝福を受けた素っ裸の女たち。森のなか、二人の横顔には安らぎの色が浮かんでいる。
「ふふふふ。ひとまずの小休止か……」
無様に大の字に転がった女たちにステラの肉体を奪った邪悪な魂が笑う。グラスとジェアーの完全な敗北であった。そして、短い休息が終わればまた辱しめの儀式がはじまることになる。女たちを助けに来る者はなく、儀式に邪魔が入るということはありえなかった。
「時間はまだある。お二人にはたっぷりと愉しんでもらおう」
ステラは口の端を歪めて薄く笑い、白い精液に塗れ、穢れた聖女たちは大きく手足をひろげたまま、快感の海を二人仲よくたゆたうばかり。奴隷として完成した女たちの上、暗い空を星が一つ、西から東にすーっと飛んで流れた。